

近世・近代における剣術・剣道の変質過程に関する研究  
——面技の重視と技術の変容——

長 尾 進

目 次

I	はじめに	( 3 )
II	飛び込み技・踏み込み足形成の概要	( 4 )
III	剣術・剣道における面技重視の技術観	( 6 )
	(1) 近代剣道における審判の心得としての面技重視	( 6 )
	(2) 修行方法論としての面技重視	( 7 )
	(3) 防具の発達過程と面技	(11)
IV	まとめ	(11)

## A Study of the Process of Change in the Quality of Kendo: The Importance of Striking the Head and the Change in Techniques

Susumu NAGAO

Kendo (Japanese Fencing) has its origin in the Shiai-Kenjutsu (practice or match with bamboo sword and protective gear). In the latter half of the seventeenth century, Kenjutsu (Japanese swordsmanship) had lost the opportunity for actual contact and had become ceremonious.

Shiai-Kenjutsu was created and developed by the Jikishinkage-ryu school in the early eighteenth century with the purpose of improving the situation. The swordsmen of the Jikishinkage-ryu wore head gear and gloves (Men and Kote), used bamboo swords and tested the techniques that had been handed down from the generation to generation in the school.

At first, Shiai-Kenjutsu only tried the traditional techniques. Later, however, it created its own original techniques. For example, the footwork called Humikomi-ashi made a strike speedy by the strong stepping of the left foot, but it was widely different from the footwork of the traditional techniques.

In the meantime, in the last days of the Tokugawa Shogunate, the practitioners of the Shiai-Kenjutsu made "striking the head" (Men-Waza) the prime technique. This emphasis remains in today's Kendo.

The purpose of this study is to clarify the relation between the importance of the Men-Waza in Kendo and the change in techniques.

The results of this study are summarized as follows:

- 1 Prior to the Koka era (1844-48), most of the Shiai-Kenjutsu schools wore Men and Kote in common (not body protector). Therefore, Men-Waza was often practiced by many practitioners.
- 2 The practitioners of the Shiai-Kenjutsu, however, assumed that Men-Waza was the most difficult technique from their experience.
- 3 On the other hand, in terms of fighting with real swords, it was considered that the Men (head) was the most effective point among the vital parts.
- 4 For the reasons given above, from the Meiji era to the early Showa era, Men-Waza was given the highest point among the Kendo techniques in the referees' understanding: especially the Tobikomi-Men (Striking-Men with Humikomi-ashi) was.

Thus, Men-Waza has been considered the primary technique throughout the modern Kendo history.

## 《個人研究》

# 近世・近代における剣術・剣道の変質過程に関する研究 ——面技の重視と技術の変容——

長尾 進

## I はじめに

近世初期、元和偃武以来実戦の場を失った剣術は、幕府による「生命に危害を及ぼす勝負試合」の禁止もあって<sup>1)</sup>、次第に形骸化（華法化）していった。このことへの反省から近世中期には、それ以前よりあった面・小手を堅固に改良したものを着け、竹刀を用いて遠慮なく存分に打ち合い、互いの技術を試し合う「竹刀打込稽古」（試合剣術）が創始された。現在行われている剣道は、この竹刀打込稽古にその端を発している。

当初は、真剣操作を前提とした伝来の技術（形剣術、刀法的技術）を、文字通り「試し合う」ものであったのが、とくに近世後期長竹刀の流行（天保年間）を契機として、試合剣術独自の技術体系の確立（弘化年間）をもたらした<sup>2)</sup>、剣術においては真剣操作を前提とした伝来の技術（刀法的技術）と竹刀操作技術（競技的技術）の分化が進んだ<sup>3)</sup>。

この点からみれば、剣道は竹刀操作独自の技術体系を確立してから、すでに約150年を経過している。にもかかわらず、剣道においては真剣操作、あるいは刀の概念を前提とした考え方がいまだに支配的であり、例えば「刃筋」「物打ち」などの概念は現行ルールの上にも反映され、ある意味で剣道技術の中核を形成している。

このことは、剣道という近世以来の歴史をもつ運動文化の特性としてある程度認容することはできよう。しかしながら、技術的に刀法的技術とはかなり乖離している現代剣道の技術を、真剣操作の観点や刀法的技術観だけから説明することに無理が起きていることが、最近指摘されるようになった<sup>4)</sup>。

すでに世界剣道選手権大会が第10回目を迎えようとしており、剣道の国際化への対応が言われるようになって久しいが、外国人剣道愛好者からの素朴な疑問、例えば、剣道技術の象徴とされる「日本剣道形」は、そのほとんどが「送り足」または「歩み足」で行われるのに、なぜ剣道ではそれとは異なる「踏み込み足」を基本技術として指導するのか、などに対して明確に答えるための理論構築はあまり行われてこなかった。

筆者は上記のような問題意識から、これまでに、近世・近代における剣術・剣道の変質過程について、とくに剣術の技術が真剣操作から離れ、「競技」としての独特の技術を形成して行く経緯について、「足遣い」（フットワーク）の技術的変容を中心に考察を進めてきた。

そこでは、近世後期における竹刀の長大化を契機として、剣術技術に直線方向への敏捷性と対応力が求められるようになり、その結果、打突の場面だけでなく進退や移動といった局面を含めた剣術の多くの場面において「送り足」が多用されるようになったことを指摘した。また、刀法的技術とは異なった技術も徐々に容認されるようになり、その代表的なものとして、「飛び込み技」があげられ、その「飛び込み技」の方法論として「踏み込み足」という技術が近代剣道における主要技術として位置付けられて行く経緯について明らかにした。

その後研究を継続するなかで、上記の飛び込み技や踏み込み足の剣道技術としての承認の背景に、近世後期以降「面技」を剣道技術の中核に据える技術観があり、そのことが剣道技術の直線方向への迅速化を相乗的に促進し、刀法的技術とは大きく異なる競技的技術を形成したのではないかと考えるようになった。

本研究では、近世・近代の剣術・剣道における面技重視の傾向について、その根拠を明らかにし、現代剣道においても引き継がれるこの技術観の背景を探ることを目的とするものである。

## Ⅱ 飛び込み技・踏み込み足形成の概要

飛び込み技や踏み込み足という、直線方向への敏捷性に富んだ技術の形成過程については、拙稿「剣道における競技的技術の形成過程について—『足遣い』を中心に—」<sup>5)</sup>においても触れたが、本研究の主目的である面技重視の技術観を解明するための基礎作業として、その後管見した資料も交えて改めてその概略を整理しておきたい。

### (1) 「飛び込み」「踏み込み」の生成

飛び込んで打つという技術は、実践としては試合剣術の弘流とともに近世後期、あるいはそれ以前から行なわれていたものと思われる。

弘化年間から嘉永年間にかけて北辰一刀流千葉周作の門に学んだ高坂昌孝（姫路藩）が著した『千葉周作先生直伝剣術名人法』には、「深箠手ヲ打タントスレバ向フ下段ニ成リ、其ノ業ヲサセスモノアリ。其ノセツハ、左ノ陰ニ取りタル儘マニテ、向フノ面ヲ飛び込ミ打テバ、甚ダ強ク当タルモノナリ」とある<sup>6)</sup>。

また、武藤為吉（久留米藩、神陰流）が師の加藤田平八郎に宛てた書簡「武藤為吉尺牘」（嘉永2年11月便、1849）に、「火急に飛込箠手の二三本も切り申し候」という表現がみられる<sup>7)</sup>。

尤も、ここにあるような「飛び込み」という表現だけでは、それが走り込んで行くような技術なのか、あるいは、右足の前方への大きな踏み出しと左足の強い踏み切りを伴う「踏み込み足」のような技術であるのか判然としないが、『千葉周作先生直伝剣術名人法』の方では「相下段・相星眼ニテ向フノ面ヲ打ツ」項で、「飛び込ミ」と「踏ミ込ミ」は同義に用いられ、「一足一刀ニ深ク踏ミ込ミ打ツ」ことを善しとしている<sup>8)</sup>。また、「一足一刀」とあることから、千葉周作のいう「飛び込み」「踏み込み」は走り込むようなものではなく、あくまで「一足」で飛び込みまた踏み込むもので、のちの踏み込み足に近い技術と考えられる。

近世・近代における剣術・剣道の変質過程に関する研究——面技の重視と技術の変容——

このような飛び込んで（踏み込んで）打つという技術は、直線方向への敏捷性や前進距離を増すことには有効であるが、身体バランスの面からは不安定となる要素をもっている。また、真剣操作の観点からは危険性の高いものであり、それまでの刀法的技術観からはこのような技術は生成されにくく、今日的完成度に近い防具を着用するようになった近世後期において、剣術がより安全性を高めたことによってはじめて出現してきた技術であろう。

これらの技術は近代に入って、「踏み込み足」の技術として確立されて行く。

(2) 「踏み込み足」の確立

近代における剣道技術としての「踏み込み足」の初見は、堀田捨次郎『剣術教範』（大正元年）において、「打ち込む音と足の動作其の踏み込む音とを同時に施す」とあるのが最初であるらしい<sup>9)</sup>。

近現代における多くの剣道書の基礎となった高野佐三郎『剣道』（大正4年）においても、明確に「踏み込み足」という表現は用いていないが、正面打ちについて「右足より踏み出し其反動にて、左足は之に伴ひて進み、敵の正面を真向に撃ち込む」とある<sup>10)</sup>。

一方、大正前期に著された大日本武徳会武術専門学校『剣道基本教授法』では、「基礎斬撃法」の各技において、「(充分に) 踏込みて」という表現が使われている<sup>11)</sup>。

このように大正前期には、「踏み込み足」を使用しての技術と思われるものが多くみられるようになってくる。その後大正後期になると、踏み込み足そのものを剣道基礎技術のひとつとして位置付ける剣道書が著される。

金子近次はその著『剣道学』（大正13年）において、「踏切及び其教授法」として踏み込み足の方法・指導法を詳述しており、とくに「左足の踏み切り」を強調しているところがそれまでの剣道書にみられない斬新なものである<sup>12)</sup>。大塚は、この方法・指導法について「技術学的に解説され、指導上でも特別に方法化され、一中略一、思い切った踏み込み足、すなわちつき抜けを可能にした」と述べている<sup>13)</sup>。

東京高等師範学校における金子の先輩である富永堅吾は、『最も实际的な学生剣道の粹』（大正14年）において「正面の（基本的な）撃ち方」として、「刀を正面に振上げ、両足にて踏み切ると同時に、右足を充分前に踏込み、一中略一、相手の正面を敏活確実に撃つ」としている<sup>14)</sup>。また、同書の「乗込み面」の項では、「乗込み面は、全然我が身を棄てて一刀のもとに相手を制しようとする撃方で、比較的遠間から施す頗る壮快な業である。刀を振上げると同時に、思ひ切って一足跳に深く乗込み」と述べている。「一足跳に」とあることから、おそらく「踏み込み足」を念頭においた記述と思われる。さらに、この「乗込み面」の場合は、先の記述に続いて「余勢は以て相手を押倒すやうであるがよい」とあり<sup>15)</sup>、打撃に伴う「余勢」を積極的に肯定しているところが注目される点である。このように大正期には、大日本武徳会武術専門学校の指導書や東京高等師範学校関係者（高野・富永・金子）らいわゆる剣道専門家の著書において、（打突後の余勢も含めた）飛び込み技や踏み込み足が剣道技術として取り扱われるようになった。その後、中山博道に代表されるような刀法的技術観から、あくまで飛び込み技や打突後の余勢を認めない意見も一部にあったが、大勢としては飛び込み技や踏み込み足は明確には否定されず<sup>16)</sup>、剣道技術として認知され、一般化して行った。

### Ⅲ 剣術・剣道における面技重視の技術観

資料の上から概観するかぎり、以上のような経緯で飛び込み技や踏み込み足は認知・一般化されてきたのであるが、本章ではその背景についてみていくことにする。

#### (1) 近代剣道における審判の心得としての面技重視

前章でみた飛び込み技・踏み込み足の剣道技術としての認知・一般化には、近代剣道における審判の心得としての面技（とくに「飛び込み面」）の重視ということが影響しているように思われる。

前出高野『剣道』（大正4年）には、「審判心得」として、「飛込面は軽くも採るべし」「甲が先に胴を撃ち後にて乙が甲の面を撃つも前後の相撃なり」「甲が先に箆手を撃ち乙が後れて甲の横面を撃ちたる時も相撃とす」と、面技を重視した項目が3つある<sup>17)</sup>。

また、小関教政述『剣道要覧』（明治43年・大日本武徳会山形支部発行）の「審判心得」にも、「飛び込み面は打ち込みたる業なれば軽くも採るべし」「先に胴を打ち少しく後にて面を打つも、前後の相打ちなり」「右箆手を先に打ち後れて、左手にて横面を打たる時も相打ちとす」と、『剣道』とはほぼ同様の記述がみられる<sup>18)</sup>。小関が明治29年の武徳祭大会より毎回審判を囑託されていたことや<sup>19)</sup>、河合昇道『剣道修行秘法』（大正5年）にも同様の記述がみられる<sup>20)</sup>ことから考えあわせると、これらの心得は当時の大日本武徳会において了解事項として取り決められていたものと考えられる。

この審判の心得としての面技重視の傾向は、『昭和天覧試合』の付録として出された『武道宝鑑—昭和天覧試合と併せて—』（昭和5年）のなかで、高野佐三郎・中山博道・斎村五郎の連名で記されている「剣道審判の心得」においても、「飛び込み面は少々軽くも採る」「甲が先に胴を撃ち、一瞬の後に乙が甲の面を確実に撃ちたる時は前後の相撃ちとす」「甲が先に箆手を撃ちて、乙が少々後れて左手横面を撃ちたる時も相撃ちとする」とほぼ同様の文言で引き継がれている<sup>21)</sup>。

ところが、その次の天覧試合の後に刊行された『武道宝鑑—皇太子殿下御誕生奉祝昭和天覧試合と併せて—』（昭和9年）にある持田盛二・斎村五郎・大島治喜太連名の「剣道審判の心得」においては、「飛込面は少々軽くも採ることがある」との項目はあるが、他の2項目（相撃ち）は削られている<sup>22)</sup>。また、同試合の公式規程である「皇太子殿下御誕生奉祝昭和天覧試合剣道試合審判規程」や「皇太子殿下御誕生奉祝武道大会審判規定並に注釈（剣道）」にもこれらの項目はなく、それらは「先後シテ撃突シタル場合ニ於テハ先ノ撃突不充分ナル場合ト雖モ後ノ撃突ハ之ヲ認メス」というように、相打ちにおける面技重視から「先」の技の重視へと置き換えられて行く<sup>23)</sup>。

打突の中でも面技を重視する傾向が、昭和期に入って次第に打突部位による優劣を問わなくなり先技重視へと移行して行く経緯を、中村は「平準化」と呼び、この先技重視には「警視庁剣道審判規程案」（大正15年）の影響がみてとれることを指摘している<sup>24)</sup>。

このように、明治後期から昭和初期までは大日本武徳会の公式の試合審判規程にその条項はなくても、審判の「心得」として「面技」「飛び込み面」が重視されており、部位による優劣が平準化された後も、先技重視の観点から「飛び込み面」重視は遺された。

近世・近代における剣術・剣道の変質過程に関する研究——面技の重視と技術の変容——

この武徳会の「面技」「飛び込み面」重視の姿勢が、近世後期より存在した飛び込み技や踏み込み足の剣道技術としての認知・一般化を相乗的に促進したものと思われる。

では次に、この近代剣道（剣術）における面技の重視はどのようなことに由来するのかについてみて行くことにする。

(2) 修行方法論としての面技重視

① 初学段階の修行方法論として

幕府講武所頭取を務めた田宮流窪田清音が著した『剣法初学記』（国立国会図書館蔵写本、天保頃）には、「うち所は面の真中と左右と裏籠手をうつべし。其外のかたは、初学びのほどはもとめてうたざるをよしとすべし。夫がうちにも、面を数々多くうたんことをおもふべし」とあり、初学の段階における面技重視の姿勢がみえる。

窪田はまた『剣法略記』（国立国会図書館蔵写本、天保10年・1839）のなかで、「初学び」の段階では、「面に籠手に数多くうつべきことなれど、夫がうち、面をうつことをむねとして十度のうち面を七度、こ手を三度うちならふべし」といい、このようにしなければ「はたらき（活用）かたよるもの」としている。また、この打ちは「生れ得しままの正しく直なるかたち」を崩さないようにして打たなければならない。

窪田の説くところは、初学の段階では生得の自然な姿勢を崩さずに、面を多く打つように心がけ、技の活用が偏らないようにすべきという方法論を示したものである。この窪田のような考え方は近代になっても受け継がれて行く。

堀正平（のち武徳会剣道範士）は『剣道の真諦』（大正12年）のなかで、技には「正奇」があり、「何事を学ぶにも正則を先にして変則を後にすべき」と説き、面技についていえば「真面で遠間より打つことを正則としている<sup>25)</sup>。真面（正面）を遠間から打つには、通常の送り足の技術では不可能であり、踏み込み足という技術が必須になってくる。

富永堅吾は前出『最も实际的な学生剣道の粹』（大正14年）で、「面業は剣道の業の内でも最も大切な業であり、正面の撃方は面業の内でも最も大切な撃方であって、多く修行し、而も最も正確に練らなければならない業」とし<sup>26)</sup>、その要領は前述したように、「刀を正面に振上げ、両足にて踏切ると同時に、右足を十分前に踏込み、一中略一、相手の正面を敏活確実に撃つ」というものであった。

檜山義質（武徳会剣道範士）も『武道宝鑑』（昭和9年）において、「面技は技の中でも最も大切な、且つ基本的のもの」で、正面を打つにも種々の方法があるが、「凡ての場合に通ずるもの」として「右足より（左足を従はせて）対者に踊りかかるやうに思ひ切って踏み込むと同時に、一中略一、両手にて真直に正面に撃ち下す」としている<sup>27)</sup>。

このように近世後期以来、とくに初学の段階においては面技が最も大切なものとされ、とくに近代においては、踏み込み足を用いて相手の正面へ打ち込むことが剣道の基本中の基本とされたのである。

またこれは、全日本剣道連盟『幼少年剣道指導要領（改訂版）』（昭和60年）において、「基本の打ち方・突き方」の第1番目に踏み込み足を用いた面打ちが位置付けられ、踏み込み足と面打ちの「指

導上の留意点」を合計すると29項目にも及ぶ（他は、小手打ち7、胴打ち5、突き8項目<sup>28)</sup>、ということにみられるように、現代においても剣道技術のなかの最重要のものとして引き継がれているのである。

## ② 真剣操作の観点から

三宅茂徳『神道無念流剣術免許弁解』（慶応3年・1867）では、「突胴ハ真剣ニテ決テ出来ヌコトナレバ、学ヒテ無益ナル故」、戸賀崎家の神道無念流では突きと胴は学ばず面と小手のみを修練するとし、その根拠として、赤穂義士の討ち入りや桜田門外の変の事例を出して、突きと胴を切ることは決して真剣ではできないものであるからとしている。三宅も竹刀剣術の実践者ではあるが、「真剣ニテ出来ヌコトヲ、平生稽古スルハ、大ナル不覚ニテ学バザルニハ劣ルベシ、方今ノ時幣ニテ、或ハ分外ニ長キシナヘヲ好ムモノアリ、一中略一、五尺有余ノシナヘモ、片手ニテ自由ニナルナレドモ、真剣ニテ、ヶ様ノ力ハタヘテナキ也」と、当時の長竹刀の流行が実際の真剣操作から懸け離れていることを批判する立場をとっており<sup>29)</sup>、その点からもあくまで真剣操作を念頭においた突き・胴打ち無用論である。

一方、神道無念流齊藤派の根岸信五郎は、『撃剣指南』（明治17年）のなかで、「殴撃ニ各種ノ法アリ。其内、敵手ノ頭部中真即正面ヲ撃打スルコトニ心ヲ用ユベシ」とし、また、とくに上段の構えからの面打ちに利があると説いている。その理由は、「敵手上段ニ構ヘ己他ノ構ヒヲ以テ之ニ対スルニ、突クモ其急所ニ達スルヤ否保証シ難ク、敵ハ之ニ反シテ其儘撃下スモノナレバ、頭部ヲ中段シ易ク、又敵手左上段ナレバ、左手ヲ撃ツニ便ナルモノナレドモ、敵手ハ之ニ関セズ、左手ヲ撃セテ右手ニテ頭部ヲ撃チ易シ。是等縦ヒ前後アルニモセヨ、突クト撃下スト、左手ヲ撃ツト頭部ヲ撃ツト、何レガ急所ニ達スベキカ、必ヤ後レタリトモ、頭部ヲ撃ツノ勝レルニ如カザルナリ」とし<sup>30)</sup>、突きや小手よりも面を撃つことの方が急所に達するという。

薩摩藩伝の直心影流や山岡鉄舟の無刀流を学び、西南の役に抜刀隊を率いて勇名を轟かした隈元實道が、実戦の体験に基づいて著した『武道教範』（明治28年）には、「常に兵字（上段）に構へたるまま、始終徐々と攻め掛け、若し敵に先んせられたらんには、我れは必らず敵の面を一刀両断すべし。中略。面の急所なるには、多少の前後も、何処の局部も、及ばざればなり」とある<sup>31)</sup>。

また、「剣術試合審判」の項の「得勝点数表」において、面（真向又は左右側面若しくは切り返し打込みの類）を10点、面（少々軽く又は反り仰く者の面金に深く打ち込みたる類）を9点とし、以下、兵字小手（上段からの小手）、胴、面の垂れ、精眼小手の順に得点は下がっており<sup>32)</sup>、ここでも面技重視の姿勢がみられる。またこれは、「軍用射撃の人体的理由に均しい」という<sup>33)</sup>。

隈元の論旨は、自身試合剣術の経験者でありながら、試合剣術を「板間裡の剣術」とよび、真剣操作と乖離した技術を排斥する考えに貫かれており、その意味では、先にみた三宅と共通するものである。また、面（頭部）は人体中の急所であり、突きや小手との比較の上では、打突における多少の前後があった場合でも面打ちを有利とする見解は根岸と共通している。

このように明治維新前後の著作においては、実戦経験あるいはそれらを見聞きした経験からの、真剣操作を念頭に置いた面技重視の傾向が見受けられるのである。



## ③ 打突の難度の観点から

内藤高治は、「剣道修行についての心得・上」(明治43年)のなかで、「無闇に胴を打たがる。是が悪い。胴といふものは一番打易い。一番打悪い所は敵に対して面を撃つには体を捨なければならぬ」<sup>34)</sup>と述べている。当時、大日本武徳会本部剣術科教頭(翌44年、武徳会武術専門学校主任教授)であった内藤のこの考え方は、「難しい技ほど練習すべし」という修行方法論としての面技の重視であり、当時の武徳会の姿勢を代表するものである。この姿勢が、Ⅱでみたような武徳会の審判心得における面技重視として反映されたと考えられる。

ではこのような内藤の考え方の原型ははどの辺りに求められるだろうか。内藤の出身流派である北辰一刀流開祖の千葉周作は、前出『千葉周作先生直伝剣術名人法』の「相下段・相星眼ニテ向フノ面ヲ打ツ節」において、「向フノ切先上ガリ下ガリニ構ハズ飛ビ込ミ打ツト云フコトハ、甚ダ無理ニテ節ニ当ラヌ」ものであるから、「向フノ切先下ガリタル処ヲ相凶ニ打ツベシ」という。また、「向フハ突カン打タント構ヘタル処ユエ、是非此ノ方ノ大キクロノ明キタル処ヘハ打ち突キヲ出ス者」であるから、「太刀ヲ半バ振り上げ打ツベシ。勿論一足一刀ニ深ク踏ミ込ミ打ツヲ善シトス。向フノ切先ニ恐レ、半信半疑ニテ打ち出セバ、三本日ノ突ナドニ当タルモノニテ、深ク踏ミ込ミ打テバ、向フノ太刀アマリテ突クコト叶ハヌ者ナリ。試メシ見ルベシ。之レ所謂、『切り結ブ太刀ノ下タコソ地獄ナレ、踏ミ込ミ見レバ跡ハ極楽』ト云フ歌ノ処ナリ。依テ兎角狐疑心ヲ去リ、一足一刀ニ打ツコト肝要ナリ」という<sup>35)</sup>。

北辰一刀流における面打ちについてのこのようなとらえ方は、内藤の言う「一番打悪い所は敵に対して面を撃つ」ということの原型であり、そのためには「体を捨なければならぬ」という考え方の基本となったものであろう。

Ⅱでもみたように、真剣操作の観点から考えれば、このような技術は危険性の高いものであり、堅固な防具を着用した試合剣術においてはじめて有効な技術であろう。小林らが指摘したように、北辰一刀流の「形」と、同流の試合剣術の技術体系である「剣術六十八手」とは相関が低く、「剣術六十八手」は試合剣術独自の技術体系であるとされる<sup>36)</sup>。「切り結ぶ太刀の下こそ…」の古歌を引用してはいても、千葉の説明する面打ちの技術はあくまで試合剣術を念頭に置いたものである。その試合剣術のなかで難しいとされる技術、すなわち相手の竹刀先(剣先)に対する恐怖を克服して面に打ち込むことによって、かえって面打ちの成功率が高くなることを説き、試合剣術としての面打ちそのものに意味をもたせようとする意図がみられる。

また、前出三宅茂徳『神道無念流剣術免許弁解』(慶応3年・1867)には、沼津藩の小野順蔵(神道無念流免許)が、他流の者から戸賀崎家の神道無念流では突きと胴を学ばない理由を問われたとき、「突胴ハ成ヤスク、頭ト箠手ハ甚切難キ処ナリ、依テ、常ニ難キ処ノ修行ヲ先キトシテ、易キ処ハ学バザルナリ」と答えたという<sup>37)</sup>。

これは、先にみた三宅の「突きと胴は真剣では決してできないものであるから、これを学ばない」とする見解と相違があり、このことで小野は三宅に戒められている。小野は「頭ト箠手ハ甚切難キ処ナリ」というが、これは真剣操作よりもむしろ、当時の試合剣術実践者の間に形成されていた見解、

あるいは彼らに共通した感覚を彼は代弁したものであろう。同門でありながら、幕末期には自流の打突部位選定理由についてこのような解釈の相違が起きているのである。

この他、筒井六華（天真白井流）著『撃剣難波之樸』（安政5年・1858）にも、「業の内、上段より快く面を打を、構第一とす」とある。但し「面を打には、上段を第一とすれども、至てなしがたき業なれば、晴眼下段等より打て可なり」ともあり、「至てなしがたき業」である「上段からの面打ち」を技の第一としている<sup>38)</sup>。

いずれにせよ、これらを見ると、それぞれに若干ニュアンスの異なるところもあるが、面技を難しいものとする傾向が共通しており、「難しい技ほど練習すべきである」という考え方が試合剣術においては近世後期から形成されており、真剣操作とは違った運動の形態、さらに進めていけば、新しい技術の理想像が創造されていたことを示すものであろう。

#### ④ 近代における真剣操作と竹刀操作の理念的結合

前出隈元『武道教範』（明治28年）では、「面の布団の上に迄も、打込むべしと云ふ理由は、真剣に臨んで、為し難き所を、平生に於て為し慣るれば、真剣に臨み、為し易きを以てなり。即ち真剣は、額を割けば充分なるも、平生は深く打込めと云ひ、真剣は胸を突くべきも、平生は胸より高くして、突きにくき面の垂れを突けと云ひ」「総べて打ちは、真剣に比して、打ち易き所を打たず。突きも、突き易き所を突かず、修業するものなり」というように<sup>39)</sup>、刀法的技術観（真剣操作の観点）と難度の高い技ほど修練すべきとする修業方法論とが結合している。

この隈元に代表される概念は、その後若干論旨を変えながらも近代を通して継承されて行く。代表的な記述を年代順に掲げると、

- 坂口鎮雄「人体中に於て打つべく斬るべく最も難しいとする所を選び、規定の防具を用いしめ難より易きに至るを練習せしむる」（『運動世界』第10号、「剣道講話六」、明治42年）<sup>40)</sup>
- 金子近次「何故正面、箠手、右胴、前突の四ヶ所のみを選定して練習するかの理由は…中略…、全身の中で最も重要な機能の存在して居る場所を撃突さるれば他の所に比して戦闘力を早く失ふ所と、全身中で最も撃突するに困難な所との二の見地からして以上の四ヶ所を選定したのである」（『教育的剣道』、大正11年）<sup>41)</sup>
- 堀正平「実戦で一番斬りやすいところは肩であるという。面の練習ができていれば肩を斬るのは易々たるものである、また面を打ち外しても肩は斬れる」（『剣道の真諦』、大正12年）<sup>42)</sup>
- 斎村五郎「剣道は何時も、真剣の気持ちを離れてはなりません。今日の練習方法は防具を着けて最も撃突し難い部分を定めて相手と約束の上で練習するのでありまして」（『刀と剣道』第2巻第2号、「質疑応答」、昭和15年）<sup>43)</sup>

などである。これらを見ると、とくに面技を重視しておらず、難しい部位についての見解も、面・小手・胴・突きという4か所の部位そのものが打突の難しい場所として選定されたという論に切り替わっており、部位の難度についての考え方が「平準化」している。しかし、防具を着けた剣術（剣道）において打突の難しい部位を修練しておくことが、真剣を操作する実戦の場においては効を奏すという考え方において、隈元実道にみられる剣術観の影響がみてとれるのである。

近世・近代における剣術・剣道の変質過程に関する研究——面技の重視と技術の変容——

限元の『武道教範』は、剣道史において名著とされる前出高野『剣道』(大正4年)、下川潮『剣道の発達』(大正14年)の両書において「斯道の書として卓出せるものの一なり」と評価された著書である。その意味からも、その与えた影響は少なくなかったと思われる。

### (3) 防具の発達過程と面技

剣術における面技重視の傾向には、近世後期における防具の発達・選定過程も間接的に影響していないだろうか。

武藤七之介『神道無念流剣術心得書』(天保頃)によれば、天保期頃までは防具の着用状況は流派間で統一されておらず、同書に記載される8流派(一刀流、直心影流、鏡新明智流、柳剛流、新陰流、義経流、浅山一伝流、神道無念流)の内、竹具足(胴)を着用する流派は半分の4流派(一刀流、直心影流、柳剛流、義経流)であった。この頃までの竹具足(胴)の構造は原初的なものであり、身体の可動性・自由性を妨げるものとして敬遠されたのである<sup>44)</sup>。

一方、面と小手については全8流派とも着用しており、このことは逆に、天保期頃までに面・小手については流派を超えてこれを着用するようになり、また打突するようになっていたことを示すものである。

また、近世後期全国的に弘流した試合剣術の代表的4流派(北辰一刀流、神道無念流、鏡新明智流、直心影流)のうち、神道無念流、鏡新明智流は胴を採用していない。これらのことは、直心影流における面・小手の工夫・改良(正徳年間)以来、一刀流中西派のように竹具足(胴)を着けそれを打突する流派もあったにせよ、試合剣術流派全体としては面と小手を打突する技術が中心となって形成されてきたといえよう。

竹具足(胴)を採用した一刀流中西派の系統である北辰一刀流においても、前出「剣術六十八手」のなかで、「面業」が技の筆頭にあげられ、しかも最も多い20手を占めていることから、同流では面技を重視していたという指摘がある<sup>45)</sup>。

このように防具の発達・選定の過程から観ても、面技は剣術技術の中核となる可能性があったのではないだろうか。

## IV まとめ

本研究では、近世・近代の剣術・剣道における面技重視の傾向についてその根拠を明らかにし、現代剣道においても引き継がれるこの技術観の背景を探ることを目的として進めてきたが、それらをまとめると次のようになる。

- (1) 天保期頃までに、試合剣術諸流派において面と小手は共通に着用し打突されるようになり、そうしたなかで、試合剣術を行う者の間に、それぞれの経験から面打ちを難しいものとする共通の認識が芽生え、幕末期には面技が剣術技術の筆頭に置かれるようになった。
- (2) また近世後期には、防具が堅固になり安全性が高められたことから、直線方向への敏捷性に富んだ打突が可能となった。そのなかで千葉周作にみられたように、踏み込み足を用いた「一足一刀」

の面打ちが難度の高い技術としてとらえられ、その難度の高い技術を相手の竹刀先や対応を恐れずに打ち込むことに価値が置かれた。この価値観は近代に入っても内藤高治の論調などに認められ、刀法的技術観からの批判も一部にはあったが、打突後の余勢を含めた飛び込み技や踏み込み足の認知・一般化を促進した。またこれは、大日本武徳会の審判心得における面技、とりわけ飛び込み面を重視する姿勢の背景にもなった。

(3) 一方、近世後期には窪田清音にみられたように、初学段階において、生得の自然な姿勢を崩さずに打つ面技を修練の中心に置き、他の技よりも多く打つことを善しとする修行方法論が生まれたが、それは技の働き(活用)が偏らないようにするためのものであった。その後この修行方法論は、近現代を通じて継承されている。

(4) 真剣操作の観点からも、面(頭部)は人体中の急所として、他の部位に比べて重きを置く論調が明治期の剣道書にみられた。とくに隈元實道に代表される、実戦経験に基く真剣操作の観点と竹刀操作における打突の難度を融合させた概念は、近代を通じて支持され、継承されていた。

以上みてきたように、近世後期すでに試合剣術は、それまでの真剣操作を前提とした刀法的技術とは異なる、直線方向への敏捷性に富んだ技術を生成していた。またそのなかで、面技を難しい技術ととらえ、その難しい面技を中心に修練することに、独自の価値を見出だしていた。これらはその後、踏み込み足による「一足一刀」からの面打ちを技術の第一とすることによって近・現代においても受け継がれ、剣道という運動文化の中心部分を形成しているのである。

#### 〈注〉

- 1) 下川潮：剣道の発達，大日本武徳会本部，296頁，1925.
- 2) 小林義雄・中村民雄・長谷川弘一：剣道の技の体系と技術化について—北辰一刀流「剣術68手」の成立過程を中心として—，武道学研究26-1，25頁，1993.
- 3) 榎本鐘司：幕末剣道における二重的性格の形成過程—競技性の顕在化および伝統性と競技性の折衷—，1988. 参照
- 4) 大塚忠義：日本剣道の思想，窓社，1995. V・Ⅶ・Ⅸ章参照
- 5) 長尾進：剣道における競技的技術の形成過程について—「足遣い」を中心に—，武道文化の研究，第一書房，1995.
- 6) 高坂昌孝：千葉周作先生直伝剣術名人法，丸善書店，1884. 渡辺一郎：史料明治武道史，新人物往来社，29頁，1971.
- 7) 武藤為吉尺牘(嘉永2年11月6日便)，1849. 村山勤治：鈴鹿家蔵・加藤田伝書『剣道比試記』について，日本武道学会第16回大会発表抄録，1883.
- 8) 前掲書6)に同じ.
- 9) 長谷川弘一：剣道における足構えの研究・その3—堀田捨次郎の著作を中心に—，会津短期大学研究年報48，239頁；1991.
- 10) 高野佐三郎：剣道，良書普及会剣道発行所，56頁，1915.
- 11) 大日本武徳会武術専門学校：剣道基本教授法(民和スポーツ文庫蔵)，同校，大正前期.
- 12) 金子近次：剣道学，聚英閣，147～150頁，1924.
- 13) 大塚忠義：近代剣道批判・第2部ルール形成過程の研究・その3—虚構的技術の発展と規定の二重構造によ

近世・近代における剣術・剣道の変質過程に関する研究——面技の重視と技術の変容——

- る軍事的再利用の研究一，高知大学教育学部研究報告第2部41号，46頁，1989.
- 14) 富永堅吾：最も実際的な学生剣道の粹，慶文堂書店，95頁，1925.
- 15) 前掲書14)，106～107頁.
- 16) 近代剣道において高野佐三郎と並び称される中山博道は，「対手を打つと手で打ってあとヒョロヒョロと二足三足位前に行く。一中略一。あれは一足一刀で打つと共に足の教だけ打って行かねばならぬ」（慶応義塾大学校友会誌「つるぎ」6，1934）と述べているように，打突に伴う余勢を明確に否定している。また，ライバル的關係にあった高野の道場「修道学院」においても，「中山博道先生は剣道の形をくわしく知って居るが，昔の形の一つでも飛び込んで打つ手はないといわれた」として，中山の飛び込み技についての見解をめぐって議論が交わされていた。（川田徳覚：剣道教訓集，1939年10月12日・11月24日部分）
- 17) 前掲書10)，103頁.
- 18) 小関教政：剣道要覧，大日本武徳会山形支部，1910. 中村民雄：史料近代剣道史，島津書房，229頁，1985.
- 19) 武道宝鑑一昭和天覧試合と併せて一，大日本雄弁会講談社，208頁，1930.
- 20) 河合昇道：剣道修業秘法，帝国尚武会，1916. 中村民雄：史料近代剣道史，島津書房，231～232頁，1985.
- 21) 前掲書19)，136～137頁.
- 22) 武道宝鑑一皇太子殿下御誕生奉祝昭和天覧試合と併せて一，大日本雄弁会講談社，263～264頁，1934.
- 23) 中村民雄：史料近代剣道史，島津書房，244～252頁，1985.
- 24) 中村民雄：剣道事典一技術と文化の歴史一，島津書房，79～80頁，1994.
- 25) 堀正平：剣道の真諦，剣道の真諦発行事務所，104・106頁，1923.
- 26) 前掲書14)，94～95頁.
- 27) 檜山義質：臨機応変の妙. 前掲書22)，183頁.
- 28) 全日本剣道連盟：幼少年剣道指導要領・改訂版，57～60頁，1985.
- 29) 三宅茂徳：神道無念流剣術免許弁解，1867. 埼玉県久喜市：久喜市史・資料編Ⅲ近世2，198～200頁，1990.
- 30) 根岸信五郎：撃剣指南，1884. 渡辺一郎：史料明治武道史，新人物往来社，17・19～20頁，1971.
- 31) 隈元實道：武道教範，武揚館，79～80頁，1895.
- 32) 同前，253～254頁.
- 33) 隈元實道：体育演武必携，武揚館，12頁，1896.
- 34) 内藤高治：剣道修業に就ての心得・上，武徳会誌9，60頁，1910.
- 35) 前掲書6)，29～30頁.
- 36) 前掲書2)，29～31頁.
- 37) 前掲書29)，199頁.
- 38) 筒井六華：撃剣難波之謀，1855. 渡辺一郎：武道伝書聚英第3集，15頁，1981.
- 39) 前掲書31)，255頁.
- 40) 坂口鎮雄：剣道講話（六）. 運動世界10，運動世界社，23頁，1909.
- 41) 金子近次：教育的剣道，体育同志会，24～25頁，1922.
- 42) 前掲書25)，100頁.
- 43) 刀と剣道2-2，雄山閣，136頁，1940.
- 44) 長尾進：試合剣術の発展過程に関する研究，武道学研究29-1，20～21頁，1996.
- 45) 前掲書24)，77頁.

（ながお すすむ）